

小樽ロータリー

クラブ会報

4

No.4015

創立1933.12.12

例会場：グランドパーク小樽
 例会日：毎週火曜日12時30分
 事務所：小樽市築港11番3号
<http://www.otaru-rotary.net/>
 発行日：2016年7月26日

2016-17年度 国際ロータリーテーマ

人類に
奉仕する
ロータリー

2016～2017年度 RI会長 ジョン F. ジャーム (John Germ)



今日のプログラム

第3例会記録 2016年7月19日

■ロータリーソング 「奉仕の理想」

■ゲスト紹介

北海道経済連合会会長 高橋 賢友様 (ゲストスピーカー)
 北海道経済連合会次長 鎌田 康輔様

■ビジター紹介

小樽銭函ロータリークラブ会長 上村百合子様
 小樽銭函ロータリークラブ副会長 坂口 友朗様

■会長報告 (泉会長)

- 7月15日(金)、入会予定者に対するオリエンテーションを実施。坂田広報情報・研修委員長、上参郷幹事と私とで対応。RCについてはそれなりの知識と理解をお持ちのようで、和やかな雰囲気で行進。お渡しした資料に要修正部分があり、予算等の関係もあるが、個人的には改訂版を出すべきと感じました。

■小樽銭函RC 上村会長挨拶

- 私の主人が30年程前に銭函RCの幹事を務め、その際現在の河崎幹事のお父様が会長でした。今回は夫人と息子の組合せです。これから銭函RCを地域に根ざしたクラブとして発展させたいと思っています。若い人達から「ロータリーってどんな活動をしているのか」とよく訊かれます。これに応えられるよう活動してゆきます。



■幹事報告 (上参郷幹事)

- 7月26日(火)は夜間例会。例会前の17時30分から18時まで藤間先生をお迎えし、潮音頭の練習(登録受付が17時45分、18時15分点鐘、18時30分より懇親会)。
- 潮ねりこみの出欠回答用紙はメールボックスに。未回答の方は本日中に。当日のスケジュール表は各テーブルに。
- 10月2日(日)の地区大会：本会議・記念講演・懇親会(並行プログラム：スパウス)。
登録料は11,000円。例年どおりバスを出す予定。各テーブルの出欠確認用紙によりテーブルマスターの方は、取り纏めのうえ、ご提出を。多くの皆様の参加をお願い致します。

「夜間例会」

・例会変更

- ◇小樽銭函RC 7月28日(木)移動例会。
17時「協坂工務店屋外スペース」
- ◇倶知安RC 8月10日(水)→8月7日(日)移動例会。
19時30分「第一会館駐車場ピアガーデン広場」

■その他報告

- 第50回「おたる潮まつり」運営委員長 今井龍興氏、副委員長の倉本氏、「2016年度ミス潮」の桑名貴子さん、寺下笑加さん等7名が来訪し、募金協力の依頼がありました。例年より多い110,407円の寄付が集まり「ミス潮」より御礼がありました。



■真心箱報告

- ・小樽銭函RC (上村会長はじめ) …寸志
- ・笠間会員…本日100点満点の車庫入れが見事一回で決まりました。
- ・遠藤会員…ゴルフ会例会にて同伴プレーヤーに恵まれ優勝しました(ハンデのおかげです)。
- ・星野会員…148回目の例大祭無事終えて。多くの会員からご芳情をいただき感謝申し上げます。お祭り期間中は晴天、後片付けが終わっての今日の雨。最良の祭典となりました。
- ・上浦会員…初めてEクラブでメーキャップをしました。

出欠調べ

(7月19日分)

1. 本日の欠席者 (14名)
石井 伸和、海老名敏男、小松田哲弘、西條 文雪、佐々木一晃、柴田 憲彦、武井 豊、中野 豊、野口 禮二、花和 嘉貴、久末 智章、平松 正人、堀岡 秀之、宮本 孝雄
2. 本日の出席者 (会員75名中60名)
(出席規定除外者9名中8名出席)
3. 前々回(7月5日)の確定出席率(会員数75人)
(義務出席会員74名 出席66名 89.19%)

前回のプログラム

「北海道経済の活性化に向けた観光産業への期待」

北海道経済連合会会長 高橋 賢友様（北電興業株式会社 代表取締役）

■ゲストスピーカー紹介（例会運営委員会 関副委員長）

ご経歴は小樽出身で早大政経学部卒業後、北海道電力㈱に入社し、小樽支店長時に当クラブに2年間在籍されました。

■北海道経済連合会会長 高橋 賢友 様

2003年から2年間、北海道電力㈱小樽支店長として故郷小樽に在籍し、小樽RCの皆様には例会だけではなく夜のお付き合い、土日のゴルフを含め、公私共にお世話になりました。現在、公職として6月より北海道経済連合会会長を務めています。



・北海道経済連合会（以下「道経連」）

1974年設立。様々な産業から合わせて479企業が参加している経済団体で、小樽市内の企業は11社。

・目的・役割

「北海道の開発は官主導で推進されてきたが、民間企業が率先して北海道経済の自立・再生を図ってゆこう」といった主旨で設立し、調査研究活動、広報活動、セミナー等を開催しつつ国や道・自治体に対して要望する活動を実施。

・主な活動内容

道経連独自の事業である「骨格事業」と道商連など他団体と連携活動する「連携事業」。現在、道経連では北海道の強みである「食と観光」、全国対比、比率が劣後する製造業の「ものづくり産業の振興」、この3本柱で北海道経済の発展、企業競争力の強化、雇用の維持・拡大を図っていく取組みを実施。

■北海道の人口動態と今後の経済見通し

・北海道の一番の課題は、人口減少・少子高齢化。1998年に569.9万人をピークに漸減し始め、2040年(24年後)には419万人になる予測。全国人口についてもピークの2008年から漸減し2060年には8,000万人台になる予測。北海道は全国に先駆けて人口減少が進展。高齢化率(65歳以上)についても右肩上がりで進行。現在の25~26%が2040年には40%となり、25年で15%程度上昇する見込み。高齢化比率につき北海道は全国より20年早く進行。この課題に対して、経済的に何を行っていくか。

・小樽市も1964年、207千人をピークに漸減し、2015年は122千人。ここ10年くらいは毎年約2千人減少。将来推計では、2060年には47千人くらいになる予測。出生率を高め、人口流失を抑制するなど対策を打つ必要がある。

・北海道の実質GDPは、2005年は20兆円、2010年は18兆円と1割の減少。2兆円は相当な減少。全国ベースではGDP拡大予想の中、北海道は17兆円程度まで低減する予測で、他のエリアに比しての減少傾向。

■地方創生の切り札としての観光産業

・宿泊客数は低迷、1999年の4,500万人強をピークに右肩下がり。観光立国として観光に強みがあるが、減少傾向。外国人を除く都府県からの延宿泊客数は、北海道は約1,350万人。関東、東海、関西エリア、沖縄よりも低位。まだまだ伸ばすチャンスはある。道外から北海道に来る観光客の交通機関の利用は、飛行機が約85%、観光客を増やすためには「空路」が大事。北海道には13の飛行場があるが、77%が新千歳空港を利用。

・道内の基幹空港は新千歳・函館・旭川。課題はスポット・

チェックインカウンター・保安検査場等の不足・狭隘、荷物配送・仕分けのグランドハンドリング会社の不足、Wi-Fi施設の使いにくさ等。準基幹空港では国際線増便等の課題。

●空港改革

・国管理の空港はプール管理され、各空港の収支が見えない状況。黒字化のインセンティブが働かず、地元の意見が届きにくく、経営感覚が乏しい。国の管理対象は滑走路であり、空港ビルとの一体的な運営・管理が現状できていない。滑走路の運営権を民間に譲り、三セクの運営する空港ビルを民間に譲渡し、「上下一体管理」をすることで民間活力による収支改善、来客数の増加、サービスの向上を目指す「空港民営化」に注目。ビル・駐車場・滑走路運営を民間に移すことで観光産業の振興を図ろうとする仕組み。

・道経連では「北海道における空港の民間委託・民営化とは、どうあるべきか」を議論。北海道には広大な敷地があり、除雪も必要。13空港中6~7空港を民間委託した一体的運営を検討中。それにより、いかにして北海道に海外の観光客を呼び込むか。新千歳空港だけでなくインバウンドを地方の空港に誘導してゆくかが課題。そのためには地方の観光資源や周遊観光ルートも必要。

●小樽観光について

・小樽は観光入込客数が4年連続増加。3・11の2011年は603万人、2015年は794万人まで回復。中国人等の外国人観光客の増加等で道内客の伸び率は2%程度、道外客は10%以上の二桁増加率。外国人宿泊客数も30~60%で年々増加。国別の宿泊者数では、中国、台湾、香港などが多く、それに韓国、タイ、シンガポールが続く。直行便の新規就航により7位のマレーシアは2013年の1,824人から、2015年の4,842人と大幅に増加。

・今後は、「新千歳、札幌にきたお客様をいかに小樽に引き込むか」が重要。北海道新幹線の開業で、特に東北との交流人口の増加を期待。新千歳に多くの外国人客が来ていただくことが大事。LCCの就航、ビザ発給要件の緩和により更なるインバウンドの増加を期待。

・小樽港には毎年、20隻以上のクルーズ客船が入るので、客船の寄港誘致にも期待。

●総括

・人口減少・高齢化が北海道の大きな課題。観光産業を基軸に交流人口を増やし、地方の創生、地域の活性化を図ってゆくこと。2020年に空港の民営化が行われる予定で準備中。

・2030年の新幹線札幌延伸を控え、その恩恵を最大限に得るため、今から対策が必要。小樽は全国から多くの人が集まる観光地。小樽が北海道の観光産業を牽引し、世界から見た日本の大きな魅力となることを期待。そのためには産学官金が連携し「オール小樽」で観光を盛り上げてゆくこと。

・これからのキーワードは「地域連携」。小樽に来たら余市のウィスキー、ワイン、その先には積丹ブルー、内陸へ行くとニセコがあり、夏はラフティング、冬はスキーといった色々な楽しみ方ができるエリアに人を周遊させることが重要。周遊人口が増えれば当然、小樽にも立ち寄る人も増える。2020年の空港民営化、2030年の新幹線札幌延伸に向けて、後志地域の各市町村や企業、商工会の方々が協力し合い、「北海道に来たら後志に誘致」を目的に、面的な観光周遊エリアの確立に期待。

■次回のプログラム 会員増強・会員維持委員会担当「会員増強について」

■本日の記事担当（西村 仁）